



本場のサウンドに酔う

日米3大学が音の競演

各サークルの新歓活動で、キャンパスが1年のうちで一番活気づく時期である。4月9日には、春のもう一つのイベント「日米親善ジョイント・コンサート」がクレセントホールで国際ムードも華やかに催された。日本からは早稲田大学ハイソサイエティ・オーケストラ（以下「早稲田ハイソ」と）、中央大学音楽研究会吹奏楽部（以下「中大吹奏楽部」）が参加、アメリカからはRiver Side Community College（以下「RCC」）が参加。1部はジャズステージ、第2部は吹奏楽ステージという構成で行われた。

「日本でコンサート RCCの願ひかなう」

早大ハイソは創部46年で、学生界を代表するジャズオーケストラ。これまで数々のコンサートで優秀な成績を収め、海外演奏も行っており、



多数のプロ・ミュージシャンを世に送り出している。RCCはロサンゼルス近郊の中核都市・Riversideにあり、1916年に創立された学校。今回はとくに積極的に活動を行っている同校の3団体の演奏を聴かせてもらった。

中大吹奏楽部は1942年に創部され、部員は100人。運営から音楽作りに至るまで学生が自主的に活動しており、週に3回、「部員一人一人が音楽家になる」という目標の下、独自のサウンドをめざして日々練習に励んでいる。

このコンサートは、そもそもRCCが「日本でジョイント・コンサートを開きたい」と申し出たもので、国際観光振興会を通じて、中大の音楽研究会（以下「音研」）が主催の形で実現した。4時を過ぎる頃には少しずつ人が集まり始めたが、開演の4時半になっても客席の3分の1が埋まった程度だった。「無料なのに」と首かしげる人もいた。

しかし、舞台の方はしだいにボルテージを上げていった。最初に登場したのはRCCの「Day Jazz Ensemble」。彼らの演

奏はバランスがよく、余裕が感じられた。2番目に登場したのは、RCCの「Vocal Jazz」である。10人ほどのメンバーがアカペラで歌を披露した。さまざまな音域の声が一つになり、素晴らしいハーモニーを生み出していた。

3番目は早大ハイソである。RCC

「米国人のDNAにジャズがしみ込んでいる」

いよいよ2部。中大吹奏楽は、さ

すが日本一を思わせる貫禄ある演奏であった。指揮も学生が行い、ジャズとは違った緊張感を感じさせた。こちらの日米合同演奏が行われ、ステージには日米で100人以上の学生が上り、人数に見合った迫力ある演奏だった。演奏が終わったモアンコールを求める拍手が鳴りやまないほどだった。

コンサート終了後、生協でレセプションが行われ、この間に演奏者や関係者にインタビューした。まず、RCCのANGELA THOMASさんは「日本のバンドには、パークッションやトランペットに女性がいて、とても新鮮だった」と話し、

Cのビッグバンドに劣らぬ迫力ある演奏で会場を圧倒した。この早大ハイソに対する米国側のスタンディングオベーションはものすごいものがあり、会場とステージが一つになった瞬間だった。さすがにこういうときのアメリカ人と日本人では全然ノリが違った。RCCのビッグバンド

のメンバーとの合同演奏も行われたが、この時はジャズという文化を日本人とアメリカ人がともに共有し合っているようだった。

学生記者 (佐多 愛子
中西 奈緒)

日米の観客の反応の違いも指摘してくれた。日本の印象をRCCの方に聞くと、「Beautiful」という答えが一番多かった。これは定期的に、サクラの美しさを褒めたたえたものと思われる。

早大ハイソの鈴木圭さんは、「きっと、米国人のDNAのなかにジャズがしみ込んでいるのではないかと日本人は後から彼らを真似て身につけているから……」と話し、同じくハイソの向井志門さん(彼は中大生だが、ハイソに属している)は、「最初は向こうが本場だから、日本人の演奏は、元からけなされているかと思ったら、本当に心から褒めてくれて感動した」と話していた。また、



米国側のスタンディングオベーション

向井さんは「ジャズが好きだという共通の感覚と、RCC側がコミュニケーションを取ろうと手を差し延べてくれたことで、いい交流となった。ジャズがフレキシブルな音楽だからこそ、国境を越えて合同演奏が実現したのだと思う」と語ってくれた。中大吹奏楽の出演者たちは「RCCのなかには、ジャズと吹奏楽を掛け持ちしている人がいて驚いた」という声も圧倒的だった。

今回のジョイントコンサートを機会に、音楽を通してだけでなく、日米の学生交流がもっと盛んになればいいなというのが、私たちの実感だった。



会場を魅了した早大ハイソ